

はじめに

クイズから始めましょう。

「餡汁あんじゅうより団子汁」ってなあーんだ？

団子の汁の方がお汁粉より美味いってことでーす！

残念でした。惜しいけど×に近い△です。字面上の表側の意味は、餡汁は心配するとう意味で同音の「案じる」に掛けられ、さらに、これを踏まえて、団子汁の方がよいといっているものです。内側の意味は、くよくよ心配してもなるようにしかならないのだから、美味しい物でも食べてゆったりしていなよ、ということになります。どうです。奥が深いでしょ。でも、これはれっきとしたことわざですし、しかも最も技巧に富んだへことわ

ざの優れものゝなのです。

日本には五万も六万もことわざがあります。その上、古い文献から新しく見出されるものもありますし、外国からも入ってくる上、現在新たに作り出されるものもありますので、その全容はだれにもわかりません。いま、世間に出回っていることわざは多くみても三千程度。そのうち常用されているのは八百くらいと推測されますので、残りの大多数は大きな辞典で見られないのです。もちろん、辞典にないものもあります。

多くの人々のことわざに対するイメージは、この八百ほどがもとになっているとみえます。そうしたことわざに対しては、ためになる、面白い、うまいこと言う、などと肯定的に見るものもあれば、否定的なものもあります。否定的な見方の一つが、常套文句だとか、決まり文句でつまらないとするものです。たしかに、いくら奇抜でユニークなことわざでも、長いこと過度に使われれば、手垢にまみれ、陳腐化してしまいます。

ことわざの歴史を見渡せば、「塵も積もれば山となる」のような昔から長く使われているものもあれば、「亭主元気で留守がいい」のように新たに生まれたもの、「目からウロコ」のように外国から入ってきたものなどが交じり合いながら、生成・流転してきています。それ故に、この中に手垢にまみれていない語句が、それこそごまんとあるのです。

本書は、そのごまんとあることわざの中から、選りすぐりのものだけで作りました。選んだ基準は、「冗談とフンドシはまたにしろ」といった言い回しの面白さを第一に、第二に「握れば拳、開けば手の平」のような軽妙で生活に役立つ思想性をもつことわざを、そして第三に、「一年の兵乱は三年の飢饉に劣る」のような強いメッセージを持つものを選定しました。たった二百にも満たないものですが、新鮮なことわざと出会い、おしゃれなことわざとして使い楽しんでもらえれば、ことわざ達も本望だと思っております。

私は本書での自分の立場を、少し気取って、「ことわざの伝達使」としました。伝道師との呼び名も考えましたが、宗教臭い感じと、どこかおこがましいとの思いから伝達使としました。命名の根拠は、廣大無辺なことわざの海から、ことわざの優れものを見つけ、新しい出合いを待つ人々に伝え、広めるのが役目だと考えたからです。